

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K03260

研究課題名(和文) 児童の道德感情帰属と道德的行動の発達の関係

研究課題名(英文) Development of the relationship between children's moral emotional attribution and moral behavior

研究代表者

長谷川 真里 (Hasegawa, Mari)

東北大学・教育学研究科・教授

研究者番号：10376973

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、子どもの発達過程において正負両方の道德感情がどのように道德行動と関係するのかを探ることである。児童期前期よりも児童期後期において道德的罪悪感と道德的誇りの反応が増加し、これらの感情は向社会的行動と正の関係が見られた。また、2つの感情は気質的要因との関連はあまりみられなかった。最も文化差がみられたのは、道德的誇りであった。カナダの子どもよりも日本の子どもの方が道德的誇り喚起場面において「嬉しい」感情の選択が少なく、「普通」の選択が多かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義  
反社会的行動回避や向社会的行動などの道德的行動は、罪悪感やプライドなどの道德感情が影響することが指摘されている。しかし、両者がどのように関係するのか、その関係の発達差と文化差については実証研究が乏しい。教育現場でも、社会性と情動の学習(SEL)が注目されるようになっており、本研究の知見は道德教育に基礎資料を提供するものである。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to explore how both positive and negative moral emotions are related to moral behavior during childhood. Ethical guilt and moral pride responses increased in late childhood were compared to early childhood, which were positively related to prosocial behavior. The two emotions were less significantly related to temperamental factors. The most significant cultural difference was found in responses for moral pride. Japanese children were less likely than Canadian children to select "happy" and more likely to select "neutral" in moral pride stories.

研究分野：発達心理学

キーワード：道德性 向社会的行動 道德感情 罪悪感 誇り 同情 攻撃行動

## 1. 研究開始当初の背景

こんなことをしてしまったら罪悪感を覚えるだろう、後悔するだろう、と予測することでその行動を差し控えることがある。このように、我々の行動決定の多くは、将来どのように感じるかという予測に影響を受ける (Harris, 1985)。本研究は、道徳的場面で予測する感情が実際の行動と関係するのかを検討するものである。

道徳規範に関わる状況で生じる恥、罪悪感、道徳的誇りなどは道徳感情と呼ばれる。道徳感情には正負 (ポジティブ・ネガティブ) 両方の感情価 (valence) がある (長谷川, 2019)。典型的なネガティブな道徳感情である罪悪感、不正行為に対する後悔と呼ばれる (Malti, 2016)。他方、典型的なポジティブな道徳感情である道徳的誇りは、道徳的基準に従って行動した後に起こる、自己に対する尊敬である (Tangney, Stuewig, & Mashek, 2007)。なお、負感情のほうが生体に強い反応をもたらすためもあり、感情研究において従来多くの負感情に焦点があっていた (長谷川, 2019)。

感情は、特定の社会的状況に対応するように我々を動機づける機能を持つ。罪悪感や道徳的に良くない行動を避けるよう人々を動機づけ (Kroll & Egan, 2004)、道徳的誇りのようなポジティブな道徳感情は、道徳からの逸脱を防ぐことに加え、向社会的行動を促す機能がある (Malti, 2016)。

道徳感情の予測または推測の研究では、典型的に「道徳感情帰属課題」が使用されてきた。これは、道徳に関係するストーリーの登場人物、あるいは回答者本人がその状況を体験した場合にどのような気持ちになるのかを推測させるものである。提示されるストーリーは、対象者にとって馴染みのある行動、あるいは理解できる状況が選ばれる。例えば、幼児対象の場合、ブランコから他児を突き落とすという行為、青年や成人を対象とした場合は売買契約や友人との約束の反古など複雑な状況が使用される。推測させる感情については、年少の子どもは主に「嬉しいか悲しいか」など、ポジティブとネガティブを一次元に配置し、その程度を問うことが多い。しかし、青年期以降になると、「嬉しい」「怒り」「ニュートラル」などの複数の感情から選択させたり、罪悪感や恥などの道徳感情そのものを用いることもある。

一連の研究の中で注目されたのは、Happy Victimizer (ハッピー・ヴィクティマイザー：以降 HV と記述する) と呼ばれる現象であった。HV とは、道徳逸脱行為をした逸脱者が嬉しい、あるいは満足などの肯定的な感情になるだろうと推測することである (Arsenio & Kramer, 1992)。最初に検討した Nunner-Winkler & Sodian (1988) 以降、幼児期の HV 反応は繰り返し見出されてきた。しかし、HV 反応の年齢変化は複雑である。児童期中期に HV 反応が減少するという知見は頑健であるが、青年期や成人期になっても HV 反応が生じる (まとめとして Nunner-Winkler & Sodian, 2020)。道徳感情帰属の発達、実行機能などの認知の発達と共感などの情動反応の両方と関係する一方、パフォーマンスは状況要因の影響も受ける。このように、道徳感情帰属は、多面的な発達過程である。

感情帰属課題は、現実場面で実際に感じる感情ではなく、感情の予測を測定するものである。Blasi (2004) は、行動の前の感情の影響は道徳行動生起において特に重要であると主張する。実証研究においても、感情を経験するよりも、感情の予期のほうが行動において重要であることが示されている (Baumeister, Stillwell, & Heatherton, 1994)。このように、感情予測は行動に影響する重要な要因の一つであるようだ。予測としての感情が行動と関係するのは、認知的表象として意思決定プロセスに間接的に影響するためと考えられる。Arsenio (2014) の整理では、この道徳的場面と感情の連合は、社会的情報処理アプローチ (Crick, & Dodge, 1994; 1996) における「データベース」に対応するという。例えば、「データベース」の中でアクセスしやすい表象が「逸脱行動とポジティブ感情」の連合 (上述の HV 反応に対応) の場合は攻撃行動を導きやすく、「逸脱行動とネガティブ感情 (罪悪感など)」の連合 (上述の UHV 反応に対応) は攻撃行動を抑制するのである。本研究はこの認知的表象としてのデータベースが実際の行動において使用されるという仮説モデルに依拠して論を進める。

以上のように、道徳感情の予期が反社会的行動と向社会的行動の双方に関係することは、それらの行動に対する働きかけを考える上で、重要な知見である。反社会的行動の抑制や向社会的行動の促進において、「そういうことをしたらどんな気持ちになるのか」という感情の予測を子どもに促す働きかけが有効であるかもしれない。しかし、先行研究には幾つかの限界が見られる。

第 1 に、日本においてはほとんど研究がないことである。第 2 に、異なる感情価 (例えば罪悪感と道徳的誇りなど) を同時に扱った研究、あるいは比較した研究が乏しいことも指摘できる。先述のように、先行研究の中心は罪悪感のようなネガティブな感情であり、道徳的誇りなどのポジティブな感情の検討は少ない。Starmans & Bloom (2016) によると、逸脱した後にネガティブな感情になることよりも、逸脱を我慢した後にポジティブな感情になることの推測の方が難しく、発達の遅れて生じることが示されている。このように、感情価ごとに異なる結果が生じる可能性がある。

以上から、本研究では、道徳的場面において予期される感情の種類が、その場面を超えた社会的行動 (反社会的行動と向社会的行動) と関係するかどうかを検討する。その際、カナダの子どもとの比較をすることから、日本の子どもの特徴も探る。

## 2. 研究の目的

本研究で検討する問題は以下の 3 点である。

- (1) 道徳的罪悪感と道徳的誇りの理解についての発達を調べる。具体的には、自己利益と葛藤する状況での「感情帰属課題」を用いて、児童期の子どもへの判断と理由づけの特徴を探る。なお、第1の目的に関連し、発達差を支える認知的、気質的要因についても探索的に検討する。
- (2) 道徳的罪悪感と道徳的誇りが道徳的行動と関係するのを探る。なお、補足的に、大学生を対象として道徳感情と道徳的行動の関係も調べる。
- (3) 以上についてカナダの子どもと比較することから、普遍性と文化差を考察する。

### 3. 研究の方法

(1) 道徳的罪悪感と道徳的誇りの理解についての発達を調べるために、児童(6歳から12歳)を対象に2つの研究を行なった。具体的には、罪悪感喚起ストーリー2種類、道徳的誇り喚起ストーリー2種類をイラストとともに提示し、もし主人公の立場だったらどのような気持ちになるのか、およびその理由を求めた(感情帰属課題)。感情は「嬉しい」「悲しい」など6種類の中から選択させた(研究1-1、研究2-1)。

(2) 道徳的罪悪感と道徳的誇りが道徳的行動と関係するのを探るために、4つの研究を行った。児童対象の研究は、上記(1)と同じ対象者である研究が2つ(研究1-2、2-2)、小学3年から6年生を対象とした調査が1つ(研究3)、合計3つである。残り1つは大学生対象の調査であった(研究4)。

研究1-2、2-2における道徳的行動の測度は、子どもが取り組んだ寄付課題、教師によるSDQ(向社会的行動の評定のみのみ)と攻撃行動尺度の評定を用いた。

研究3では、不道徳な行動を我慢するまたは向社会的な行動をするという道徳的誇りに関するストーリー5つと、不道徳な行動をするまたは向社会的な行動を回避するという罪悪感に関するストーリー5つから構成される10のストーリーを提示し、どのような気持ちになるのかを回答を求めた(道徳感情帰属課題)。同時に、道徳的行動の頻度も問われた(道徳的行動の自己評定)。

大学生においては、不道徳な行動をするまたは向社会的な行動を回避するという罪悪感喚起場面4つ、または、不道徳な行動を我慢するまたは向社会的な行動をするという道徳的誇り喚起場面4つを提示し、自分自身がどのような気持ちになるのかの回答を求めた(道徳感情帰属課題)。同時に、日常の攻撃行動および向社会的行動の頻度も問われた(道徳的行動の自己評定)。

(3) カナダの子どもに対して研究1-1、1-2と同様の調査を行なった(研究5)。

### 4. 研究成果

上記の研究の方法で示した(1)から(3)について、得られた成果を述べる。

(1) 研究1-1、2-1において、児童期前期よりも児童期後期において道徳的罪悪感と道徳的誇りの反応が増加した。また、2つの感情は気質的要因との関連はあまりみられなかった。

道徳的誇り喚起場面では、学年が高くなるほど「普通」を選択する子どもが増えた。「普通」の選択理由には、「嬉しい気持ちと悲しい気持ちの両方がするのでプラマイゼロ」という入り混じった感情をもとにしたものと、「手伝うのは当たり前のことだから」という慣習領域に含まれる反応が大多数であった。

(2) 研究1-2、2-2において、道徳的罪悪感と道徳的誇りは向社会的行動の促進と関係した。誇り場面における「普通」反応は向社会的行動と関係しないことが示唆された。

研究3では、高学年の子どもは中学年の子どもよりも、道徳的誇りに関するストーリーにおいて正の感情を帰属し、仲間はずれ場面においては仲間はずれをするときに正の感情を帰属した。また、罪悪感と誇りを帰属した子どもは、道徳的に行動する傾向が高いという弱い証拠が得られた。

研究4では、大学生において向社会的行動場面での悲しみ、および向社会的行動回避場面での満足が向社会的行動の少なさと関係した。また、向社会的行動場面での誇りは向社会的行動の多さと関係した。攻撃行動と感情の関係がみられなかったのは、本研究の参加者の日常での攻撃行動の少なさが原因の一つと考察された。

(3) 最も文化差がみられたのは、道徳的誇りであった。カナダの子どもよりも日本の子どもの方が道徳的誇り喚起場面において「嬉しい」感情の選択が少なく、「普通」の選択が多かった。

### 付記

本研究はトロント大学との共同研究の形で実施しており、一部の材料の使用においてはライセンス契約を結んでいる。また共有データの公表に制約がある。そのため、ジャーナル論文の採択前に詳細な手続きと結果を報告できない。なお、本報告の差し替えを予定している。(2022年6月10日現在)

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Hasegawa Mari	4. 巻 -
2. 論文標題 Preschoolers' and Third Graders' Understanding of the Causal Relations of Emotions and Behaviors in Moral Situations	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jpr.12323	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 長谷川真里	4. 巻 8
2. 論文標題 「ごめんなさい」という気持ちはどこから生まれるのか：子どもの罪悪感の発達	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 子ども学	6. 最初と最後の頁 203-222
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 長谷川真里	4. 巻 91
2. 論文標題 異質な他者への思いやり：寛容性と社会的排除の発達 (特集 「思いやり」の発達科学)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 心理学ワールド	6. 最初と最後の頁 17-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 越中 康治・目久田 純一・淡野 将太・徳岡 大・中村 多見	4. 巻 2
2. 論文標題 道徳の教科化と評価の導入に対する教員の認識	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宮城教育大学教員キャリア研究機構研究紀要	6. 最初と最後の頁 83-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川真里	4. 巻 13
2. 論文標題 児童における道徳感情帰属の発達と道徳的行動との関連	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 道徳性発達研究	6. 最初と最後の頁 48-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mari Hasegawa	4. 巻 16
2. 論文標題 Understanding of moral emotions and social exclusion in pre-schoolers and third graders	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 European Journal of Developmental Psychology	6. 最初と最後の頁 595-610
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/17405629.2018.1482743	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mari Hasegawa	4. 巻 29
2. 論文標題 Understanding mixed emotions and moral emotion attributions in children aged 5-6 years	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 International Journal of Human Culture Studies	6. 最初と最後の頁 168-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.9748/hcs.2019.168	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 越中 康治・目久田 純一・中村 多見	4. 巻 1
2. 論文標題 児童館職員の保有資格と価値観との関連	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宮城教育大学教員キャリア研究機構研究紀要	6. 最初と最後の頁 105-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 越中 康治・目久田 純一・淡野 将太・徳岡 大	4. 巻 54
2. 論文標題 国民意識と道徳教育均質化志向及び道徳の教科化への態度との関連	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宮城教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 425-431
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 長谷川真里・越中康治
2. 発表標題 小学生の道徳判断と向社会的行動の関係
3. 学会等名 日本発達心理学会大会第33回
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 越中康治・長谷川真里
2. 発表標題 小学生の道徳感情帰属と向社会的行動との関連 ( 3 )
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長谷川真里・越中康治
2. 発表標題 小学生の道徳感情帰属と向社会的行動との関連 ( 4 )
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長谷川真里・越中康治・その他
2. 発表標題 子どもの情動的コンピテンスの発達
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 越中 康治・長谷川 真里
2. 発表標題 小学生の道德感情帰属と向社会的行動の関係 (1)
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会論文集
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 長谷川 真里・越中 康治
2. 発表標題 小学生の道德感情帰属と向社会的行動の関係 (2)
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会論文集
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 M. A Carr (Ed)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Nova Science Publishers	5. 総ページ数 164
3. 書名 Understanding Emotions.	

1. 著者名 清水 益治、無藤 隆、五十嵐 元子、金山 元春、和田 美香、森野 美央、越中 康治、大内 晶子、宮田 まり子、木下 光二、中村 章啓、瀧川 光治、鶴 宏史、佐久間 路子、前田 泰弘、松寄洋子、民秋 言、小田 豊、枋尾 勲、矢藤 誠慈郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 164
3. 書名 子どもの理解と援助	

1. 著者名 長谷川真里（分担執筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 171
3. 書名 教師と学生が知っておくべき教育心理学	

1. 著者名 越中 康治（分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 146
3. 書名 新 保育ライブラリ 子どもを知る 子どもの理解と援助	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	越中 康治  (Etchu Koji)  (70452604)	宮城教育大学・大学院教育学研究科高度教職実践専攻・准教授   (11302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件



8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------